

書 評

Ian Hesketh, *The Science of History in Victorian Britain:
Making the Past Speak*
(London: Pickering & Chatto, 2011)

村 岡 健 次

今日通常歴史家と称される専門的でアカデミックな歴史研究者は、西欧においても日本においても19世紀後半に大学を舞台に誕生した。彼らは近代歴史学の祖といわれるレオポルド・フォン・ランケ(1795-1886)の提唱した方法、すなわち主観を排し、客観的に正確な事実(史料)をして語らしめる(といっても今日の一般的な理解からするなら、「客観的」も「正確な事実」もその字面どおりに受け取るわけにはいかないのであるが)という歴史叙述の態度をもって自らのディシプリンとし、それまでの主観的な物語的歴史叙述を排斥した。本書の表題にいうThe Science of History(以下、科学的歴史の訳語を当てる)とは、このディシプリンとそれに則って書かれた歴史のことを意味している。このような歴史学と歴史家は、日本においては明治維新後、近代化(=西洋化)の一環として成立する。1887年にランケの弟子ルードウィッヒ・リース(1861-1927)が東京大学に招聘されて史学研究法と世界歴史を講じ(在任1902年まで)、専門的な史学研究者の団体(=史学会)が設立されて最初の研究誌『史学雑誌』を創刊したのがその濫觴であった(1889年)。ではイギリスではこの種のランケ流の歴史学と歴史家、つまり科学的歴史はどのように成立したのか。それがざばり、本書の主題である。

まずヴィクトリア朝草創期の科学的歴史を担った歴史家たちを挙げておく必要がある。その正統派の大物は、1866-84年にオックスフォード中世・近代史欽定講座教授を務めたウィリアム・スタブズ(1825-1901)、その後を継いだエドワード・フリーマン(1823-92、オックスフォード在任1884-

92)、1895–1902年にケムブリッジ近代史欽定講座教授を務めたアクトン卿(1834–1902、正式名J. E. E. ダルベーク-アクトン、ロード・アクトンと通称される)の三人である。スタブズは中世史公文書 Rolls Series の編纂でも知られ、その公文書史料を駆使して主著『イギリス国制史』三巻(1873・78年)を著した。この著作は主観を殺して史料をして語らしめる客観的叙述に終始し、本書の著者ヘスケスによるなら、一人称は第三巻にいたるまで出てこない。フリーマンは『ノルマン征服史』六巻(1867–76年)を著し、後述のように、科学的歴史を擁護して大論陣を張った。アクトン卿はドイツで教育をうけ、テリンガーとランケに学んだ生粋のランケ主義者。彼には史料をして語らしめる客観的歴史は歴史の法廷でなければならないとする倫理的態度があり、大学者として評価は高かったが、ついに主著を残さなかった。彼の最大の業績はランケ主義にもとづいて書かれた叢書『ケムブリッジ近代史』(1902年)を編集したことで、本叢書はヴィクトリア朝科学的歴史の総決算と見なし得る。また彼はイギリスにおける最初のアカデミックな専門誌 *English Historical Review (EHR)* の創刊(1886年)にも尽力した。

ところで先に日本における科学的歴史の成立は明治維新後の西洋化であったと述べたが、西洋最先進国のイギリスにおける科学的歴史成立の契機は、むろんそう簡単に特定はできない。だがヘスケスによるなら、ヘンリ・トマス・バックル(1821–62)の『イギリス文明史』二巻(1857・61年)の出現は、その一契機であった。この本はわが国では、概して福沢諭吉『文明論之概略』との関連でのみ知られているが、方法論としてはコントの実証主義やケトレの統計学を踏まえて歴史の法則性を主張した点にその一特色がある。そして草創期の科学的歴史は、歴史の法則性を主張するバックル『文明史』の科学性を批判し(たとえばスタブズとアクトン)、それにランケの史料主義・客観主義を対比することで自らの「科学的」立場を自覚することができたのであった(本書第一・二章)。

だが科学的歴史の成立にとって、バックルは主要な敵ではなかった。対立と論争は歴史のナラティブ(物語)性をめぐって立ち現われた。というのも、たとえ科学的歴史であってもそれが歴史であるかぎり、叙述という言語表現に頼る他はなく、作品のナラティブ性は科学的歴史にも付いて

廻らざるをえないからである。実際科学的歴史が成立するまでは、スコットの歴史小説をも含めて、マコーリもカーライルもその大方は一般読者を引きつけるべく文章表現に技巧を凝らした物語的歴史であった。また科学的歴史家も頼らざるをえない出版社は、彼らにたいしても、詳細に事実を積み上げるアカデミックな客観的研究よりは一般向けの読みやすい歴史書の執筆を要請して止まなかった。だから科学的歴史が、早晩すぐれて主観的で芸術的・文学的でもありうる物語的歴史の抵抗に出会うのは必至だった。

対立は端的に学界の中から起こった。1860-69年にかけてケムブリッジ近代史欽定講座教授の地位を占めたのは、何とチャールズ・キングズリ(1819-75)であった。スタブズはこの人事を慨嘆したが、インテリ読書界は概して好感をもって迎え、進歩的な大学内にも大きな反対はなかった。彼が歴史についても主観的・芸術(文学)的方法を支持し、科学的歴史を拒否したのは言うまでもない。ついで彼の推薦で彼の後を襲ったのは、ジョン・ロバート・シーリ(1834-95)であった(在任1875-95)。彼はこの地位に就くまでは、匿名で書いて読書界を騒がせた『この人を見よ』(=イエス伝、1865年)以外に著作を持たなかった。彼はやがて歴史学の大学教授として科学的歴史の主張者に転ずるが、彼が後世歴史家として知られたのは、その講義録を一般読者向けに編集した帝国史『イングランドの膨脹』(1883年)によってであった(第三・四章)。

だが最大の難敵はジェイムズ・アントニ・フルード(1818-94)であった。彼はその著『信仰の報い』(1849年)によってオックスフォード運動とイギリス国教会を批判したため、オックスフォードのフェロウの地位を失い野に下ったが、公文書史料を駆使した大著『ウルジ枢機卿の死から無敵艦隊敗北までのイギリス史』十二巻(1856-70年)を書いて歴史家としての地位を固めた。だが彼は「史料というものは、それが書かれた時代・社会の先入見に染められており、それが歴史家によって用いられるとき、さらにその歴史家の先入見で染められる。この二重の意味で史料とは本来主観的なものなのだ」という、すぐれて今日的な歴史認識の持ち主であった。こうして彼は歴史の客観性を否定し、「歴史はあくまでも史料にもとづかなければならないが、歴史家の本領はそれを表現する文章の技巧にある。歴史家

はすべからくシェイクスピアを範とすべし」と主張し、物語的・芸術（文学）的歴史の旗手となった。

正統派の科学的歴史家がこのフルードを前にして黙っているはずはなかった。先述のフリーマンが反撃の先頭に立った。彼のフルード批判は痛烈を極め、フルードの歴史認識と芸術（文学）的歴史の主張をもって読者への阿りが高じた救い難い病であると断じ（以後「フルード病」なる研究者用語が生まれる）、フルードは本来的に歴史家には不適合でその資格はないと切って捨てた。そして最初の学会誌 *EHR* は彼の論文の掲載を拒否し、かくして彼は、新生のアカデミックな科学的歴史学界からは追放されてしまった。だが歴史は皮肉にできている。フリーマンが死んだ後そのオックスフォード中世・近代史欽定講座のポストに就いたのは、他ならぬフルードその人であった（在任 1892-94）（第五章以下終章「フルードの逆襲」まで）。

以上本書の内容をそのさわりを中心に紹介してみた。本書の特色は、数多の雑誌・論壇の書評、当事者である歴史家たちの著書・論文・講演録、彼らの書簡、オビチュアリ等を史料に、ヴィクトリア朝草創期の科学的歴史を、それをとり巻く読書界・出版界の中に位置づけ、それがすでに出発当初から科学 vs. 芸術（文学）という、いうなれば歴史学の宿命的緊張関係の中にあつたことを明らかにした点にある。だがこの種の分析手法は最近のもので、一昔前の史学史にはとても期待できなかった。というのも近頃の歴史学界には 1990 年代以降、文学研究にも共通する認識の転換、すなわちあの linguistic turn（テキストとしての史料は、その書き手の主観が構成する表象でしかない）が進行しており、気鋭の本書の著者もそのただ中にあるからである。著者は本書の序で「ヴィクトリア朝における科学的歴史の成立を考察することは、一つの共同体 community の創立とそこでの中心的神話 central myth の構成を考察することに他ならない」（p. 10）と述べているが、著者においてヴィクトリア朝草創期の科学的歴史とは、そういう歴史の書誌をめぐる共同体が生み出す一つの神話なのである。この見方は、私見では、たとえばアナル派第四世代ロジェ・シャルチエの『読書の文化史——テキスト・書物・読解』（福井憲彦訳、新曜社、1992 年）とも通じ合う。また著者が、近時話題のヘイドン・ホワイトの物語の歴史哲学を意識

しているのは言うまでもない (p.164)。本書は linguistic turn 以後のすぐれたイギリス史学史研究と言ってよかろう。

なお著者ヘスケスは、Queen's University (カナダ・オンタリオ州キングストン) 芸術・科学部歴史学科の教員。Intellectual history 専攻。他に *Of Apes and Ancestors: Evolution, Christianity and the Oxford Debate* (University of Toronto Press, 2009) の著作がある。